

パネル・ディスカッション「1755年11月1日、リスボン地震  
— その思想史的意味」開催報告

On the Panel Discussion “Significance of the Lisbon Earthquake of  
1 November 1755 for the History of the Ideas”

渡名喜 庸 哲

TONAKI Yotetsu

2013年10月26日(土)、社会科学古典資料センターの主催するパネル・ディスカッション「1755年11月1日、リスボン地震 — その思想史的意味」が、一橋大学附属図書館時計台棟コモンズにおいて開催された。この催しは、同センターによる第五回目となる特別資料展示「ヴォルテール『リスボンの災厄についての詩』をめぐって」(10月22日(火)～11月1日(土))に合わせて行なわれたものである。

1755年11月1日に発生したリスボン地震は、当時の政治や社会に大きな影響を及ぼしたが、なかでも「災害」をどのように考えるかということについて大転換をもたらすほどの思想的インパクトをもつものであった。とりわけ、資料展示の主たる対象となったヴォルテールの『リスボンの災厄についての詩』の影響は大きかった。本パネル・ディスカッションでは、このヴォルテールの議論を中心としつつも、「リスボン地震」それ自体の思想史的意味を探るため、この主題に直接・間接に関わる国内の哲学・思想分野の研究者を招き、議論を行なった。パネラーとして、ヴォルテールの批判の背景にあったライプニッツの『弁神論』を翻訳し、「オプティミズム」概念についてもこれまで多くの論稿を著している佐々木能章氏(東京女子大学教授)、18世紀フランス政治思想を専門とし、ヴォルテールの『リスボンの災厄についての詩』へのルソーの応答を取めた『ルソー・コレクション』の編集も務める川出良枝氏(東京大学教授)、『カント全集』中の「オプティミズム試論」の翻訳者であり「震災」をめぐる哲学的・倫理的考察を展開する加藤泰史氏(一橋大学教授)に登壇いただいた。提題者として、特別資料展示の解説を担当した渡名喜庸哲(東洋大学研究助手)が参加し、司会を一橋大学社会科学古典資料センター教授の山崎耕一氏が務めた。

まず渡名喜からいくつか問題提起をさせていただいた。リスボン地震の惨劇を見たヴォルテールは、「オプティミズム」、すなわちこの世界は神が創造した世界のなかでも最善であるという説に対して厳しい批判を投げかけた。この批判は「災厄」ないし「災害」を考えなおす機縁となり、とりわけルソーに見られるように個別的な「人間」の側の関与・責任がクローズ・アップされたり、カントにおけるように自然災害に対する科学的認識が開始されたりすることになる。とはいえ哲学的に見るとヴォルテールの批判をもって「オプティミズム」概念の妥当性が失われたわけではない。むしろ全体的な「善」(あるいは「摂理」)との差異において、逆に人間の領分が明確に意識されるようになったとすら言えるだろう。そのなかで、「オプティミズム」と「カタストロフ」の関係をどう考えるのか、とりわけ現代的な観点からはこの問題をどう捉えなおすべきかという問いが提起された。

佐々木氏からは、ライプニッツのオプティミズムの考え方の基本、つまりこの世界が最善で

あるというのはあくまで神の立場からのものであるということがまず指摘され、その後ライプニッツ本人が17世紀末に著した地震論（『プロトガイア』）が紹介された。ここからすると、ライプニッツにとって、「災害」は端的に自然的な現象にほかならず、そこには神の意志のような「超自然的」な力が介入する余地はない。とはいえ、ライプニッツは、人間は無力にとどまるとは考えておらず、むしろ神の立場と人間の立場とを峻別することで、予知や対策など人間の「実践」をもきわめて重視していたことが指摘された。佐々木氏はさらにこのような「実践家」ライプニッツの姿を、リスボン地震の直後にリスボン復興を進めた廷臣のポンバル侯爵に見る。ポンバルは地震を天罰だとするイエズス会士マラグリーダらの抵抗を排し、きわめて合理的・実務的な対処をすすめていったのだ。このようにライプニッツのオプティミズムを捉えなおすと、彼の考えはリスボン地震によって消えたどころか逆に現実的な力になりうるものが結びとして指摘された。

「リスボンの震災をめぐるヴォルテールとルソーの対立」と題された川出氏からの報告は、次の三つの点をめぐって、両者の対立の争点を浮き彫りにするものであった。第一戦は、「悪」をどう解釈し、どう受容するか」をめぐる。ヴォルテールは神の摂理をやみくもに批判するのではないが、『リスボンの災厄についての詩』では、人間に対してもたらされた「悪」、その「不幸」を鋭く描きだした。対してルソーはあくまで最善説を固持し、現世超越主義的と言うべきか、個別的な人間に対する悪には冷淡にとどまった。第二戦は、「天災か人災か」をめぐる。この点については、ヴォルテールへの返信にあるように、人間の側の関与、その文明の進歩それ自体に内在する「人為の悪」に対する鋭い批判を展開したルソーにむしろ分がある。第三戦は、「共感」のおよぶ範囲を考えてみたときに、ヴォルテールには国境を越えたコスモポリティズムが、ルソーには「祖国愛」を重視したパトリオティズムが見られる。こうして両者の対決を再演させることで、「人間」ないし「人為」と「自然」との関係、また「近代化」をどう考えるかについていまなお立ち戻る参照項が浮かび上がってきたと言えよう。

加藤氏からは、ゲーテの『詩と真実』におけるリスボン地震の言及からはじまり、ドイツにおけるリスボン地震受容の論点を示された。なかでもカントは、ヴォルテールが「兄弟たちが難破するなか平然と嵐の原因を探ろうとする」と述べた者に相当するかもしれない。ただしそれは単なる非人間的態度にゆきつくのではない。リスボン地震の翌年からカントが取り組んだ地震論三篇に示されるように、そこにあるのは科学的見地にに基づいた近代的・合理主義的態度なのである。加藤氏は、このような見地からカントの地震論の内容をまとめ、さらに、カントによるヴォルテール『カンディード』末尾の引用、ルソーの影響、ライプニッツに対する両義的な態度を整理し、「災害」および「オプティミズム」をめぐるカントの立場を明確化した。もちろん、ルソーの影響を受けた批判期とそれ以前のカントにとくに「道徳」をめぐって変遷があるが、加藤氏は最終的に、前批判期のカントには、悪の問題を人間化することなく、人間が自然に対してもつ道徳的關係を思考することを可能にする「自然倫理学」の構想があったのではないかとの考えを示唆した。

休憩をはさみ、まずはパネリスト間で全体討議が行なわれた。議論の焦点の一つは、各思想家においてやはり理解が異なるように思われる「オプティミズム」の概念をどう理解するかにあった。素朴に言って、もし神の立場からしてこの世界が最善であれば、人間が何をしようがどうしてもよいことになりはしまいか。そのとき、人間の営為はどういう意味を持つのか。すぐさま惹起されたこうした問いに対し、佐々木氏からは、ライプニッツは神の立場と人間の立場とを峻別しつつも人間の側の実践を看過したことはなく、むしろ「地上のオプティミズム」の

ような構想を練っていたことが指摘された。それはたとえば、個々の「悪」を見越し、それを社会全体でカバーしようとするような「生命保険」の発想——ライプニッツ自身が確率論や統計学的知見に基づき構想していたものである——にも見てとられるだろう。川出氏からは、18世紀フランスにおいては、「オプティミスム」よりも「理神論」が議論の中心を占めていたことが指摘された。これによれば、創造主としての神を信仰することと、天罰など神に想定された超自然的介入を拒否することとは両立する。この点では、ルソーもヴォルテールもさほど遠くないことが指摘されつつ、やはりルソーに色濃く残る反進歩主義的態度の特異性が強調された。カントについては、加藤氏から、そのオプティミスム観のゆらぎおよび批判期とそれ以降との差異があらためて確認され、『カンディード』末尾の「庭の教訓」から、カントはキリスト教的世界観から脱却した「自律」の重要性を読みとっていたことが指摘された。

続くフロアとの質疑では、中国におけるリスボン地震の受容が紹介されたり、あるいは「オプティミスム」以降の「神」の行方について問いが発せられたりするなど、幅広い見地からの議論がなされた。これらの議論を通じ、「オプティミスム」とそれをめぐる「人間」および「神」との関係、「人為」と「自然」についての理解がますます深まってゆくこととなったと言えるだろう。むろん、リスボン地震をめぐって18世紀に示されたこうした理論的枠組みを、今日における「災害」をめぐる言説と照らし合わせたり、その現代的意義を再考したりすることをはじめ、まだまだ論ずべき点は多く残されている。とはいえ、日本において本ディスカッションの主題を論ずるにはもっとも適した三名のパネリストを中心とした議論によって、リスボン地震の思想史的意義がはっきりと浮かびあがったように思われる。

当日は巨大台風という「自然災害」の接近が報じられていたこともあり一時には開催自体が案じられたが、「神慮」ゆえかこの台風は向きを変え、無事にディスカッションにこぎつけることができた。そのような悪天候にもかかわらず、会場に足を運んでくださった来場者およびスタッフの方々にはあらためてお礼を申し上げたい。社会科学古典資料センターには、歴史的価値をもつ貴重資料がほかにも多く保管されているが、それらがますます掘り起され、その意義について論ずる機会が今後いっそう続いていくことを願ってやまない。

(東洋大学国際哲学研究センター研究助手)